福岡市埋蔵文化財調査報告書第1133集

弥永原 7

－弥永原遺跡第７次調査の報告－

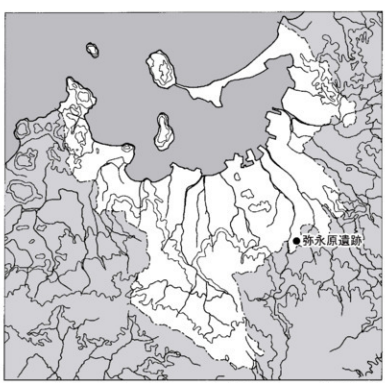
２０１１

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1133集

弥永原 7

―弥永原遺跡第７次調査の報告―



遺跡略号　　YNB－7
遺跡調査番号　０２２５

２０１１
福岡市教育委員会

序

古来より文化交流の窓口の役割を果たしてきた福岡市には、大陸や朝鮮半島との交流を示す多くの文化財が地下に残されており、発掘調査によって数多くの文物が次々と発見されています。これらを守り伝え、先人の遺産として活用していくことは現代に生きる私たちの責務ですが、大半が市街地の再開発にともなって発見されることから、その保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書は個人住宅建設に伴って実施した弥永原遺跡第７次調査成果について報告するものです。発掘調査では、弥生時代の環濠の一部とみられる遺構を確認し、弥永原遺跡の内容を解明する新たな手がかりを得ることができました。

この報告書が市民の皆様の文化財保護への理解を深める手助けとなり、また学術研究や社会教育の分野においても幅広く活用されれば幸いと考えます。

最後になりましたが、調査にあたり、ご協力いただいた関係各位に深く感謝いたします。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山 田 裕 嗣

例　言

1．本書は平成14（2002）年度に福岡市教育委員会が行った、福岡市南区柳瀬１丁目121-3 所在の弥永原遺跡第７次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査及び整理報告書作成は、専用住宅建設に伴う国庫補助事業として実施した。
3．発掘調査及び整理報告書作成は福岡市教育委員会の吉武学が担当した。
4．検出遺構には、発見順に２桁の連番号を付した。
5．遺構番号の頭には、遺構の性格を示す記号としてSD（溝）・SP（柱穴・ピット）を付した。
6．本書に使用した遺構実測図の作製は、調査担当者が行った。
7．本書に使用した遺物実測図の作製は、調査担当者のほか、田中克子（技能員）が行った。
8．本書に使用した図の製図は田中が行った。
9．本書に使用した写真の撮影は吉武が行った。
10．本書に使用した方位は全て磁北である。
11．本書の執筆・編集は吉武が行った。
12．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺　跡　名	弥永原遺跡第７次調査		遺跡調査番号	０２２５	
遺跡略号	ＹＮＢ－７		調査地地籍	南区柳瀬１丁目121-3	
開発面積	１３２．３２	調査対象面積	６８	調査面積	５６
調査期間	2002年(平成14年)6月25日～７月２日				

本文目次

第一章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1．調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2．調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第二章　遺跡の地理的位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1．弥永原遺跡の位置と周辺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2．弥永原遺跡のこれまでの調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第三章　発掘調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　1．発掘調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　2．発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　3．溝SD-01と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　4．包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第四章　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

挿図目次

Fig. 1　弥永原遺跡周辺の遺跡（1/25,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Fig. 2　弥永原遺跡のこれまでの調査地点（1/4,000）・・・・・・・・・・・・・・・4
Fig. 3　調査地点周辺の遺構（1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Fig. 4　調査区の位置（1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
Fig. 5　弥永原遺跡第７次調査　遺構配置と土層略図（1/40）・・・・・・・・・・・7
Fig. 6　溝SD-01土層断面図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Fig. 7　溝SD-01出土遺物実測図１(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Fig. 8　溝SD-01出土遺物実測図２(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Fig. 9　溝SD-01出土遺物実測図３(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
Fig. 10　溝SD-01出土遺物実測図４(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig. 11　溝SD-01出土遺物実測図５(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Fig. 12　溝SD-01出土遺物実測図６(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Fig. 13　溝SD-01出土遺物実測図７(81・82は1/1、83～86は1/2、他は1/3)・・・・・16
Fig. 14　包含層出土遺物実測図(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

図版目次

PL. 1　1．調査区東半（西から）　2．調査区全景（西から）
PL. 2　1．溝SD-01遺物出土状況（北東から）　2．溝SD-01完掘後（北東から）
PL. 3　1．溝SD-01遺物出土状況（東から）　2．溝SD-01土層断面（東から）
　　3．調査終了後（西から）
PL. 4　出土遺物（縮尺不同）

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市では文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、公共・民間の各種開発事業に対する事前審査を行い、開発によって埋蔵文化財が損なわれる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成14年、福岡市南区柳瀬１丁目121番３において、個人専用住宅の建築が計画され、５月８日付けで福岡市教育委員会あてに計画地内の埋蔵文化財の有無についての事前審査申請書が提出された。申請地は福岡市文化財分布地図では弥永原遺跡に含まれ、かつ近隣では過去に発掘調査が行われていたことから、申請地内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いものと考えられた。しかしながら、現地は戸建て住宅がマス目状に並ぶ住宅街の中にあり、丘陵斜面を段状に分厚く盛土して宅地造成した対象地の地形的制約から、重機を投入して試掘調査を行うことが不可能であった。このため、宅地工事による盛土の除去時に立会調査を行うこととしたが、平成14年６月25日に行った立会調査の結果、盛土下で確認した厚さ20㎝の遺物包含層から多量の遺物が出土し、かつ直下から遺構が検出されたため、急遽、人力掘削による発掘調査に切り替えることにした。調査は平成14年６月25日から７月２日までの間で実施し、調査後はそのまま宅地工事に引き継いだため埋め戻しは行っていない。

個人住宅にかかる事業であるため、発掘調査は国庫補助の適用を受けて福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課が行い、整理報告書作成はやや遅れて平成22年度に行った。

2．調査の組織

調査にあたり、地権者の方には快いご理解とご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。調査は以下の組織で行った。

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　　生田征生（調査時）、山田裕嗣
調査総括　埋蔵文化財課長　　山崎純男（調査時）、田中壽夫（現埋蔵文化財第２課長）
　調査第２係長　　田中壽夫（調査時）、菅波正人
調査庶務　文化財整備調整管理係　　御手洗清（調査時）
調査担当　事前審査係（立会調査担当）　田上勇一郎
　調査第２係（本調査担当）　吉武　学
調査協力　嶋ヒサ子、清水明、西田文子、野口ミヨ、松永重子、宮崎タマ子、森田祐子、山内恵、山崎光一（五十音順、敬省略）
整理協力　田中克子（技能員）、萩尾朱美

第二章　遺跡の地理的位置と歴史的環境

1．弥永原遺跡の位置と周辺遺跡　Fig.1

背振山系と東平尾丘陵に挟まれた福岡平野中央部には、御笠川・那珂川等の河川により形成された洪積中位段丘面の断続的な連なりが東西に２列認められる。福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水を経て那珂川町安徳にのびる面と、福岡市博多区板付から諸

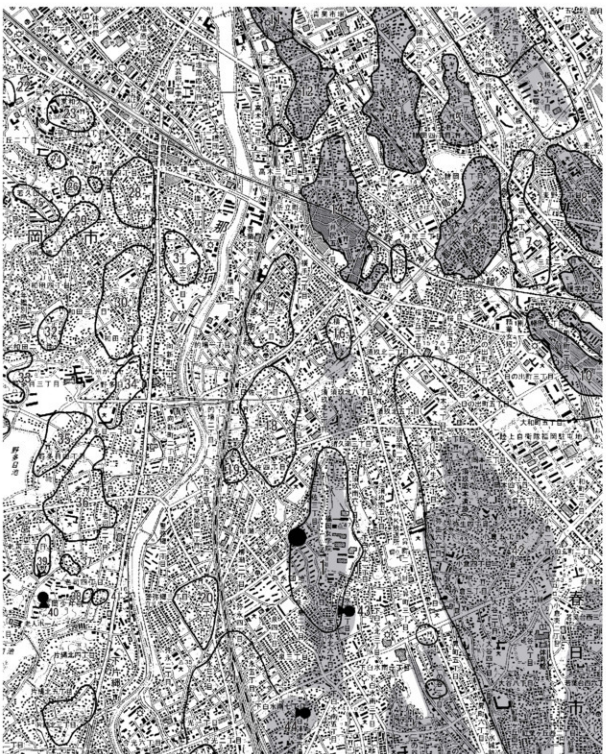
岡、麦野、元町を経て春日市春日原に達する面で、これらは地質学上須玖面と呼ばれ、主に阿蘇山起源の広域テフラであるAso-4火砕流堆積物によって構成され、沖積低地から３～20mの比高差を有する平坦な丘陵となっている。このうち前者の春日市須玖～下白水にのびる丘陵上に、弥永原遺跡は位置している。この丘陵は、後述する第３次調査の報告書（1967年）掲載の遺跡付近地形図では畑地と記され、周辺には水田が広がっており、調査地が比高差8.5mの低丘陵上に位置することが示されているが、市営弥永団地造成などを契機として昭和40年頃から急速に宅地化が進んだ。ほぼ南北方向に細長く伸びており、南北約2000m、東西500mほどの広さを持ち、南端あたりが最も高く海抜標高30mを超え、北へ向かって高度を下げていき、北端の須玖あたりでは標高20mを下まわり沖積地に埋没していく。丘陵は浸食によりいくつかの枝丘に分かれた八つ手状をなすが、大きくみれば北側から細長く入り込んだ谷部によって東西二つに分かれるとみなすことができ、東の丘陵に比べて西の枝丘陵が２m前後低く、ともに北へ緩やかに傾斜している。遺跡は東西の丘陵上にそれぞれ分布しており、うち東丘陵の遺跡はかつて「日佐原遺跡」と呼ばれ、埋葬遺構が主に確認されていることから、日佐原遺跡＝墓地、弥永原遺跡＝集落として一対になるものと考えられているが、今は弥永原遺跡として一括りにまとめられている。

周辺遺跡については、北方は丘陵が島嶼状に高度を下げつつ連なっていき、これらの上に寺畠遺跡、井尻Ｂ遺跡、五十川遺跡、那珂・比恵遺跡群などが立地する。東方は低地を挟んだ丘陵上に須玖岡本遺跡を代表とする春日丘陵遺跡群が、西方は微高地上に警弥郷Ａ・Ｂ遺跡等が立地する。南方は下白水の鞍部を挟んで標高36.1mの丘陵となり日拝塚古墳が造営されているが、このあたりでは低位水田面との比高差は20m近くに達する。これらの遺跡は、一部では弥生時代前期から集落や水田が営まれるが、特に弥生時代中期後半以降は、福岡平野にあったとされる奴国の枢軸を担った地域と考えられており、著名な弥生時代遺跡や首長墓を含む古墳などが顕著である。

２．弥永原遺跡のこれまでの調査　Fig.２・３

弥永原遺跡は、住宅建設等に伴う小規模面積の調査が多く、遺跡の全容は不明確である。うち、第２・３次調査では弥生時代環濠が確認されており、本調査との関係が特に深い。

第１次調査（以下「調査」は省略）は1958年に福岡女学院建設に際し、福岡県教育委員会・九州大学考古学研究室が行った。丘陵尾根を中心に弥生時代後期の石蓋土壙墓・箱式石棺墓・甕棺等が多数確認され、一部に銅鏡・玉・鉄製品等の副葬品を持つ。別地点には弥生時代中期の甕棺墓域があり、第６次で一部を確認した。**第２次**も1965年に福岡県・九州大学により、弥生時代後期の陸橋を伴う環濠や住居跡を確認した。第３次以降は全て福岡市教育委員会が調査しており、**第３次**は1967年に弥永団地建設に伴い、第２次と重複して調査。Ｂ地区の弥生時代後期環濠は断面逆台形で南端に陸橋があり、北側は徐々に浅くなり、北方の第５次までは伸びない。弥生時代中期後半～後期の竪穴住居跡もあり、南に離れたＡ地区では方向が異なるＶ字溝（弥生時代中～後期）を確認した。**第４次**は1988年に公園建設に伴い、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の竪穴住居跡を確認した。**第５次**は1996年に共同住宅建設に伴い、弥生時代後期竪穴住居等の集落の一部を確認。**第６次**は2002年に福岡女学院増築に伴い、弥生時代中期中頃～後期前半の甕棺墓・土壙墓・石棺墓等を確認し、かつ墓域が北へ広がらないことが判明。**第７次**は本書。**第８次**は2003年に共同住宅建設地外周部のみを調査し、弥生時代中期後半～古墳時代初頭を中心とする竪穴住居等の集落の一端を確認。**第９次**は2006年に共同住宅建設に伴い、弥生時代後期～終末の竪穴住居跡・土壙墓などを確認。**第10次**は未報告だが丘陵縁辺に相当し、2007年に専用住宅建設に伴い古墳時代前期～中世の重複する溝を確認している。



1. 弥永原遺跡（●は調査地点）、2. 板付遺跡、3. 高畑遺跡、4. 諸岡A遺跡、5. 諸岡B遺跡、6. 笹原遺跡、7. 三筑遺跡、8. 麦野A遺跡、9. 麦野B遺跡、10. 南八幡遺跡、11. 那珂遺跡群、12. 五十川遺跡、13. 井尻A遺跡、14. 井尻B遺跡、15. 井尻C遺跡、16. 寺島遺跡、17. 横手遺跡、18. 口佐遺跡、19. 上口佐遺跡、20. 警弥郷A遺跡、21. 警弥郷B遺跡、22. 野間A遺跡、23. 野間B遺跡、24. 大橋A遺跡、25. 大橋B遺跡、26. 大橋C遺跡、27. 大橋D遺跡、28. 大橋E遺跡、29. 三宅A遺跡、30. 三宅B遺跡、31. 三宅C遺跡、32. 和田A遺跡、33. 和田B遺跡、34. 野多目A遺跡、35. 野多目B遺跡、36. 野多目C遺跡、37. 老司A遺跡、38. 老司瓦窯跡、39. 卯内尺古墳、40. 老司古墳、41. 老松神社古墳、42. 春日丘陵遺跡群、43. 下白水大塚古墳、44. 日拝塚古墳

Fig.1　弥永原遺跡周辺の遺跡（1/25,000）

※アミは中位段丘の略範囲

Fig. 2　弥永原遺跡のこれまでの調査地点（1/4,000）

※アミは第３次調査報告書の地形図による丘陵範囲

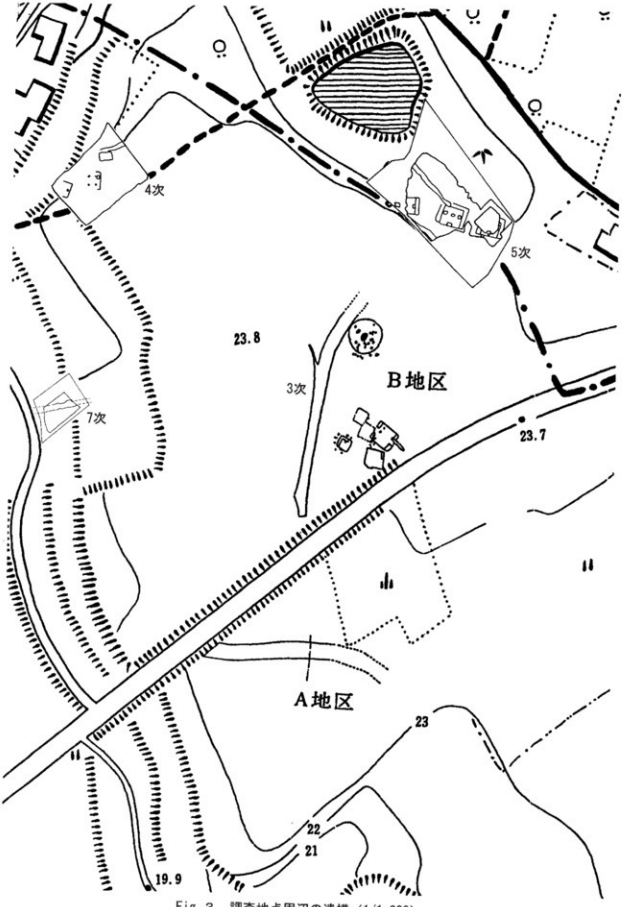


Fig. 3　調査地点周辺の遺構（1/1,000）

※「弥永原遺跡４（第604集）」に加筆

第三章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法と経過　Fig.4、PL.1

第一章で述べたように、申請地は住宅街の中にあり、丘陵西側斜面を段状に盛土造成した狭い平坦地上に住宅が建てられており、隣接道路と２m近い段差があって、通常の方法では重機を搬入することが不可能であった。このため、開発業者による盛土のスキ取りの際に立会調査を行った。宅地盛土下は、畑地もしくは水田の耕作土とみられる旧表土（暗褐色粘質土）となり、表層には雑草も残っていた。旧表土下は黒色粘質土の遺物包含層で、厚さ20cm弱の層からコンテナ４箱の遺物が出土した。包含層下は花崗岩バイラン土と八女粘土が流出再堆積した地山土となり、この面で大型の落ち込み（溝）の一部が確認されたため、重機による盛土除去を中断し、人力掘削による本調査へ移行した。調査は平成14年６月25日の立会に始まり、７月２日をもって終了した。調査後は埋め戻しを行わず、掘り上げた状態のままで建設業者に引き渡した。

遺構実測に用いた基準線は任意で、1/20平面実測図及び必要な図を作成し、周辺測量を行って調査区の位置を記録した。標高は都市計画図から引用した。

2．発掘調査の概要　Fig.5、PL.1

弥永原遺跡は南北に細長く伸びる丘陵上に立地している。第７次調査地点はこの丘陵の西側斜面に位置しているが、現在は宅地造成により段状の平坦面となっている。

調査区の形状は、南にやや広い台形状の平面形をなし、東西最大長10.6m。南北最大長6.1mを測る。敷地北側には半地下式のコンクリート造車庫があり、調査区北辺はこの掘り方により幅１mほど攪乱されている。南辺は工事のための鋼矢板により幅30cmほど攪乱されており、実質的な調査区の南北長は５m弱である。

基盤土は花崗岩バイラン土と八女粘土が流出再堆積した砂～粘質土層で、緩く西に下り、標高18.3～19m弱を測る。東隣の宅地面は遺構面より２m以上高く、西側の道路は遺構面にほぼ等しい高さにある。

検出遺構は、厚さ20cm弱の遺物包含層（弥生時代中期～古墳時代前期）及び弥生時代後期末の溝１条と時期不詳の小ピット群である。溝は横断面が逆台形状を呈し、幅1.5m、深さ0.4～0.5mで、調査区内で約８mを確認した。西へ向かってかなりの勾配があり、底面は水流によってえぐられた窪みがあり、下層には粗砂が堆積していた。勾配の緩やかな部分では、上層から廃棄土器がまとまって出土した。

調査時には包含層からコンテナ４箱、溝から同11箱が出土したが、整理による分類・接合、抽出等により25箱となった。弥生時代後期の土器が主体を占めており、少量の古式土師器のほか、須恵器小片が僅かに出土した。他に、石鏃、砥石などの石器が数点ある。

Fig.4　調査区の位置（1/200）

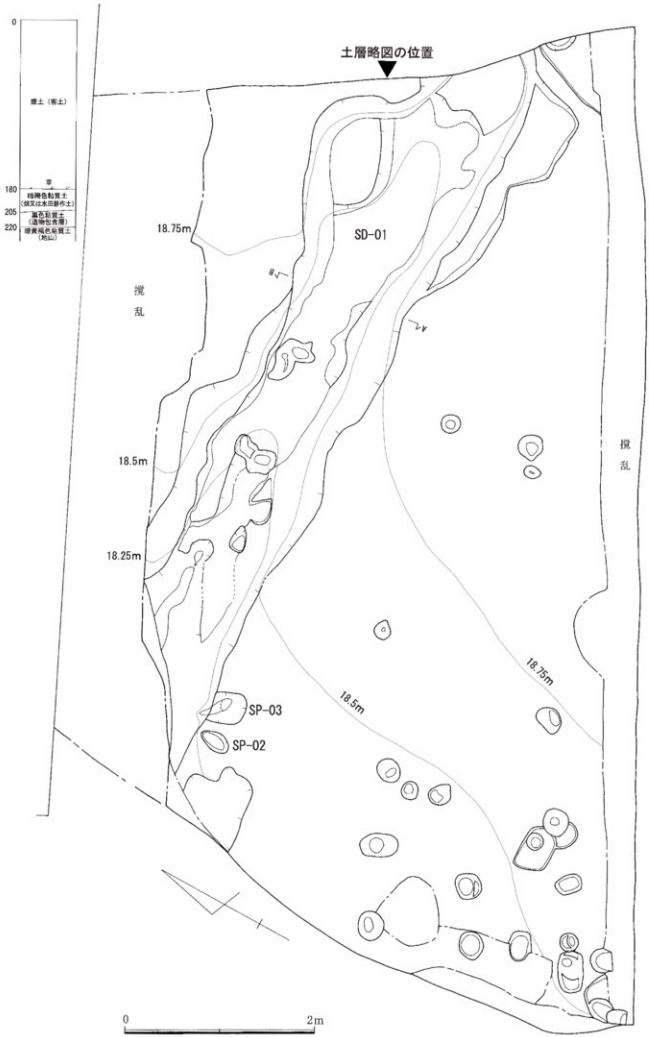


Fig. 5　弥永原遺跡第7次調査　遺構配置と土層略図（1/40）

3．溝 ＳＤ－０１と出土遺物　Fig.5・6、PL.2・3

調査区中央から北半を占める溝である。調査区内では斜めに走るが、主軸方位は磁北に直交しており、東西方向に直線的に伸びる。溝の基盤土はバイラン土と八女粘土が流出再堆積した砂～粘質土層で、西に緩く下っており、遺構検出面の標高は18.3m～19m弱を測る。この遺構面の上に厚さ20cm弱の黒色粘質土が堆積しており、弥生時代中期～古墳時代前期の土器が多量に包含されている。溝は横断面が逆台形状を呈し、幅1.5m前後、深さ0.4～0.5mで、調査区内で約８mの長さを確認した。西へ向かってかなりの勾配があり、底面の標高は17.8m～18.7mである。特に西端部で急に深くなっており、この部分は水流で底面が抉られて窪みとなっている。溝の上層は遺物包含層に近似した黒色粘質土が堆積しており、下層は灰褐色砂質土となり、最下層には粗砂が堆積する部分があって水が流れたことを示している。勾配の緩やかな溝の東半部分では、上層から廃棄土器がまとまって出土した。

遺物は土層図に示した①～③層に概ね区分して上・中・下層で取り上げ、調査時にはコンテナ11箱を数えた。弥生時代中期から古墳時代までの遺物を含み、量的には弥生時代後期末頃のものが主体を占める。上層では古式土師器がまとまって出土しており、古墳時代前期頃までは溝が完全に埋没していなかったものと考えられる。また、遺構検出時にピット等を見落としており、下層まで古式土師器や須恵器片が混入している。

ＳＤ－０１出土遺物　Fig.7～13、PL.4

遺物整理の結果、包含層出土遺物と接合したためコンテナ18箱となった。**１～66**は弥生土器、67～78は古式土師器、**79・80**は須恵器、81～88は石器である。以下で説明する弥生土器・古式土師器は、特記するもの以外は胎土に砂粒を含み、色調が橙褐色系で、焼成良好である。

１～23は弥生土器の甕である。**１**はＴ字形口縁、**２**は逆「Ｌ」字形口縁で、ともに小片で磨滅が著しい。２は焼成不良。**３～６・８**は「く」字形口縁で、磨滅が著しいが、調整の分かるものでは外面刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ。３は口縁内面刷毛目。４・６は焼成やや不良、８は不良。**７・９～**13も「く」字形口縁だが屈曲が緩い。**７**は内面刷毛目、口縁外面横ナデで刷毛目を留める。内面に煤が付着。焼成不良で破面が黒色をなす。**９**は小片のため図の傾きは不確実。内外面とも刷毛目、焼成やや不良。10は外面に右下がりのタタキのち頸部刷毛目、内面は刷毛目。胎土に砂粒のほか暗赤色粒を含む。11・12は小型の甕で、12の外面に刷毛目を留めるが、いずれも磨滅著。焼成不良。13は復元完形の甕で不安定な平底をなす。胴外面は平行タタキのち一部に刷毛目を加え、下半は上方に向けてヘラ削りする。タタキは水平・右上がり・右下がりの三様がありランダムである。内面は細かい刷毛目で、口縁内面斜刷毛目のち端部を横ナデ。外底は弱い刷毛目。14～16は口縁が強く外反する。内外面とも刷毛目を施す。17・18は同一個体で、口唇を面取りして板小口による刻目を施し、胴部は台形突帯２条を貼り付けヘラ刻目を入れる。内外面とも刷毛目で、外面突帯横ナデ。焼成不良。19は胴部で、高めの台形突帯を貼付し刻目を加える。外面刷毛目のち突帯横ナデ、内面磨滅。胎土に砂粒のほか雲母粒を含み、焼成不良。20～22は頸部に三角形突帯を貼付する。磨滅するが内外面刷毛目で、突帯横ナデ。21は胎土に砂粒のほか雲母粒・カクセン石を含み、焼成不良で破面黒色。22は胎土に雲母粒が加わり、焼成不良。23は頸部に台形突帯を貼付する。外面は平行タタキのち縦刷毛目、斜刷毛目の順

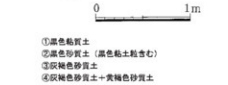


Fig.6　溝SD-01 土層断面図（1/40）

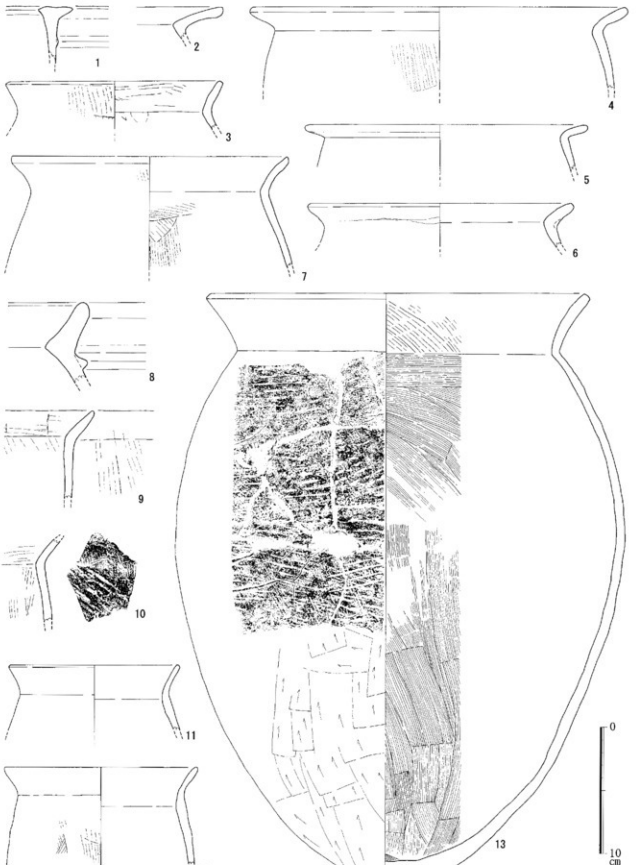


Fig. 7　溝SD-01 出土遺物実測図1 (1/3)

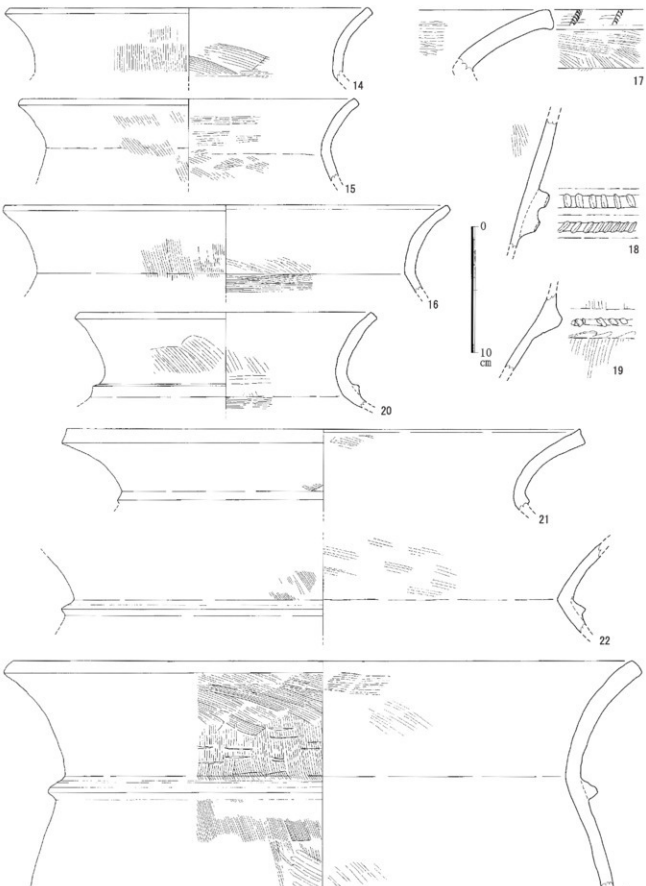


Fig.8 溝SD-01 出土遺物実測図2 (1/3)

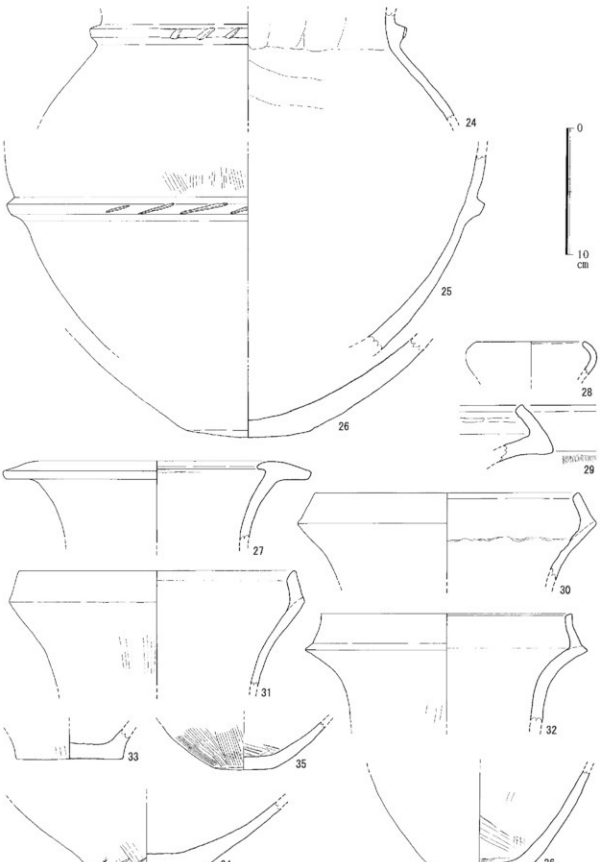


Fig.9　溝SD-01 出土遺物実測図3（1/3）

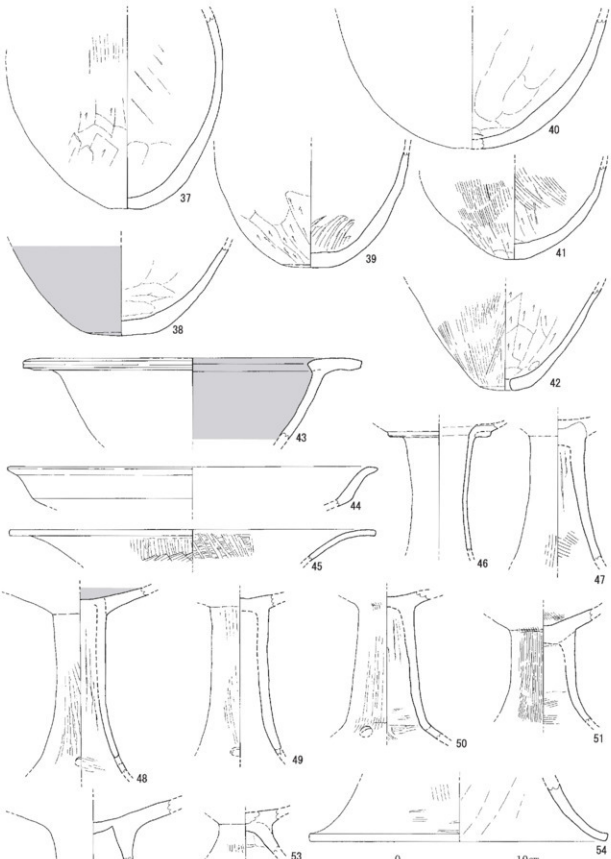


Fig.10 溝SD-01 出土遺物実測図4 (1/3)

に施し、突帯を貼付し横ナデ。内面刷毛目だが磨滅が著しい。焼成不良。

24～26は接合しないが同一個体の大型壺である。器面が磨滅するが、外面刷毛目、内面ナデとみられ、頸部と胴下半に台形突帯を貼付し横ナデ。ヘラ刻目を施すが、頸部と胴部では施文方法に差異がある。凸レンズ状底部をなす。胎土に砂粒のほか雲母粒・暗赤色粒・カクセン石を含み、焼成やや不良。27は鋤先口縁壺。内外面ナデ、口縁横ナデ。内面黒褐色で、胎土に雲母粒が加わり、焼成不良。28は袋状口縁壺。胎土精良で雲母粒・暗赤色粒を含む。29～32は複合口縁壺で、いずれも磨滅して調整痕を残すものが少ないが、29・31・32は外面に刷毛目が残る。30・32は胎土に雲母粒が入る。

33～42は甕・壺類の底部である。33・34は壺底部で安定した平底。外面刷毛目、外底ナデ、内面剥落。ともに胎土に雲母粒が混じり、焼成不良。35は丸みのある平底で、内外とも刷毛目。焼成不良で二次加熱を受ける。36～39は底部痕跡が残る丸底である。36は内面刷毛目のちナデ、外面は二次加熱により器面剥落する。焼成やや不良。37は外面粗刷毛目のち底部周辺ヘラ削り、内面板状工具によるナデ。胎土にカクセン石が混じる。38は外面丹塗り、内面は指押さえ痕が残るのみ。胎土精良、焼成不良。39は外面ナデ、底部ヘラ削り、内面ナデのち底部刷毛目。黒褐色で焼成不良。40～42は丸底。40は内外面ナデ。胎土に径４㎜前後の粗砂粒を含み焼成やや不良。41は外面刷毛目のち底部ヘラ削り、

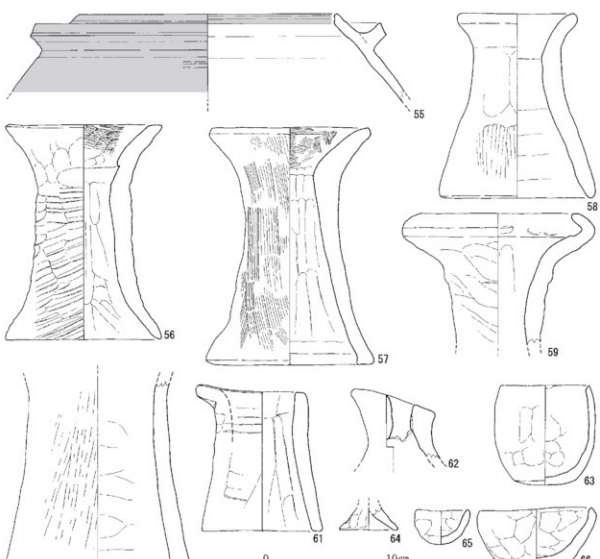


Fig. 11　溝SD-01 出土遺物実測図5（1/3）

内面ナデのち刷毛目。黒褐～暗橙色で焼成不良。42は焼成前に下から底部穿孔し、外面刷毛目、外底ナデ、内面ヘラ削り。胎土に径５㎜前後の粗砂粒を含む。

43～54は高坏である。43は逆「L」字形口縁で、内面から上面に丹塗り、外面剥落するが全面丹塗りか。胎土精良で雲母粒を含む。44は口縁が短く立つ高坏である。器面剥落。胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。45は口縁が長く開く高坏。外面は縦刷毛目のち斜刷毛目、内面は横刷毛目のち雑なミガキ。最後に口縁横ナデ。胎土精良。46～52は高坏の坏底から脚上部の破片である。46は脚上端に三角形突帯が付く。器面剥落。胎土精良で雲母粒を含む。47も磨滅が著しいが外面刷毛目のち研磨か。内面シボリのち刷毛目。胎土精良、焼成不良。48は坏内面丹塗り。脚には焼成前穿孔を外から相対する２ヶ所に施す。外面刷毛目のちミガキ、内面シボリのちナデ、下端を刷毛目のちナデ。胎土精良で雲母粒を多く含み、焼成不良。49も脚下部に透孔があるが数は不明。外面刷毛目、内面磨滅して調整痕消滅。胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。50は脚下部に３ヶ所の透孔を入れる。外面刷毛目のち雑なミガキ、内面シボリのち削り気味に横ナデ。灰褐色。51は低脚で坏内底ナデと刷毛目、脚外面刷毛目、内面はナデ、横ナデ、刷毛目。灰褐～暗褐色で、胎土に砂粒と雲母微粒を含み、焼成不良。52は磨滅が著しく調整不明。胎土に多量の砂粒と暗赤色粒を含む。53は脚付き鉢かもしれない。外面刷毛目のち横ナデ、内面指押さえのちナデ。54は高坏の脚端部か。小片のため図の法量は不確実。外面縦刷毛目のち端部横刷毛目、内面は螺旋状にナデ。胎土に細砂粒のほか雲母粒・カクセン石を含む。

55は特異な器形だが、上端部には丹塗り痕があり、無頸壷か。口縁直下に高い台形突帯を貼付し、横ナデ後ミガキを加えたか。内面は磨滅が著しく、内外面とも丹塗りであった可能性がある。胎土精良で雲母粒を含む。56～60は器台である。56は指押さえ後右上がりのタタキ、内面シボリ後、上端粗刷毛目、下端ナデ。灰褐色で焼成不良。57は外面刷毛目、内面シボリ後ナデ、上端刷毛目、下端横ナデ。暗褐色で二次加熱を受ける。58は外面刷毛目のちナデ、内面ナデ、口縁内外横ナデ仕上げ。灰褐～黒褐色、二次加熱受ける。59は口縁が袋状にすぼむ。外面は螺旋状に強くナデ、口縁横ナデ。内面ナデで口縁内面に指押さえ痕が残る。淡褐～淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒少なく雲母粒を含み、焼成不良。二次加熱を受ける。60は外面刷毛目、内面ナデで、下端は横ナデ。底部は無調整。淡黄褐色で、胎土に径５㎜前後の粗砂粒を含み、焼成不良。61・62は杏形支脚。61は磨滅するが外面タタキであろう。内面はシボリ痕をナデる。二次加熱を受ける。62は器面剥落し調整不明。上面は上方から穿孔し、内面に粘土が垂れる。二次加熱のため脆い。63は小型の鉢で、ナデ調整。黄褐色。64～66は手捏ね土器で、いずれもナデ調整。64は鉢の脚か。65は小型の碗形で、胎土にカクセン石が加わる。66はやや大振りの碗形で、暗褐～黒褐色をなし、胎土に砂粒が極めて多く焼成不良。

67～78は古式土師器で、71は溝下層、他は上層出土。67は甕で磨滅が著しい。胎土精良、焼成やや不良。68は布留系甕で胴部内面ヘラ削り、口縁横ナデ。胎土精良。69は大型の二重口縁壷か。外面に刷毛目が残るが磨滅が著しい。胎土に径５㎜前後の粗砂粒を含み、焼成不良。70は二重口縁壷の胴部のみほぼ残る。外面は単位の不明瞭な荒いヘラミガキ、内面は上半に指押さえが残り、下半は刷毛目。胎土精良で雲母粒を含む。71は高坏で坏部のみ完存する。外面に甘い段を持ち、内外面とも刷毛目のち雑な横ヘラミガキ。暗橙褐～黒色で、胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。71は下層出土だが、粗砂の中に円形に切り込んだ黒色粘質土から出土しており、検出漏れのピットの遺物であろう。72は高坏脚で、内面のヘラ削り以外は磨滅し調整不明。胎土精良で雲母粒を含む。73も高坏脚であろう。小片のため図の傾きは不確実。器面剥落する。74・75は鉢でいずれも小片。74は内面指押さえ後刷毛目か。外面磨滅。胎土精良で径２㎜前後の粗砂粒を多く含み、雲母粒が加わる。焼成不良で破面黒色。75は調整不明。胎土精良で雲母粒を含む。76は脚付き鉢。体部ナデ、内底に指押えが残る。脚との接

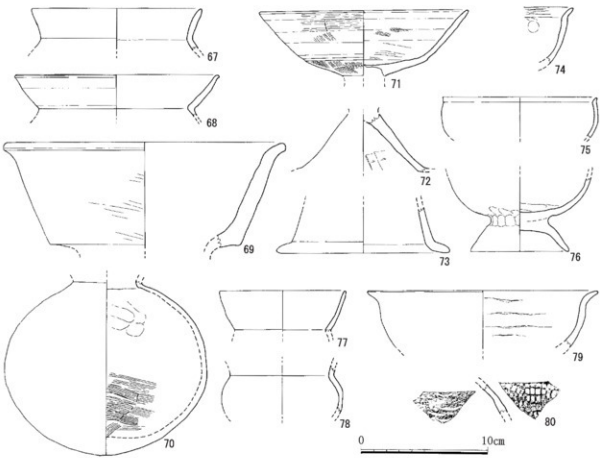


Fig. 12　溝SD-01 出土遺物実測図6 (1/3)

合部外面に指押さえ、脚内面はヘラ状工具によるナデ。淡黄褐色で、胎土精良、焼成やや不良。77・78は小型丸底。磨滅して調整不明。77は胎土精良で雲母粒を含む。78は胎土精良、二次加熱を受ける。

79・80は須恵器である。79は碗か。横ナデだが、内面に粘土帯の継ぎ目が残り粗雑な仕上げである。灰黒色で、胎土精良。外面の一部が降灰により銀化する。土師器模倣の須恵器の可能性もある。80は甕の胴部小片か。外面擬格子タタキ、内面半円文当て具痕を半スリ消し。

以上の土器は、1、2、27、43、55が弥生時代中期後半、4～6、8、28が同中期末～後期初頭頃、67～78が古墳時代前期、79・80が同後期以降で、他の土器は弥生時代後期後半から末頃に位置付けられよう。71など明らかに後出遺構の見落としにより混入した遺物があり、須恵器も同様であろう。

81は打製石鏃で先端は新しい欠損。サヌカイト製。82は漆黒色黒曜石剥片の打瘤下に左右から抉りを入れて折っており、つまみ形石器か。83はガラス粒混じり安山岩製の剥片で、背面に自然面を大きく残し分厚い。二次加工・使用痕はない。84は石庖丁であろう。凝灰岩製か。85は小型の扁平片刃石斧残欠で、刃部が潰れる。頁岩製。86は小型の砥石片で、正面・背面・右側面を使用する。粘板岩製。87・88は砥石片で、正面側のみを使用する。ともに花崗岩を利用する。

弥生時代後期末頃の溝と考えられ、古墳時代前期頃まで窪みとして残っていた可能性が強い。

4．包含層出土遺物　Fig. 14、PL. 4

主要な遺物を報告する。いずれも古式土師器。89は布留系甕で、胴部外面刷毛目、内面ヘラ削り、口縁は磨滅するが横ナデか。黒～暗橙褐色、径2mm以下の砂粒を含み、焼成不良。90も甕で接合完形。球形胴部で短く口縁が開く。胴外面は粗刷毛目、内面ヘラ削りで底部に指押え痕を残す。口縁内面に横刷毛目のち内外横ナデ。暗橙褐～黒褐色で、径4mm粗粒混じりの細砂粒を多量、雲母微粒を少量含

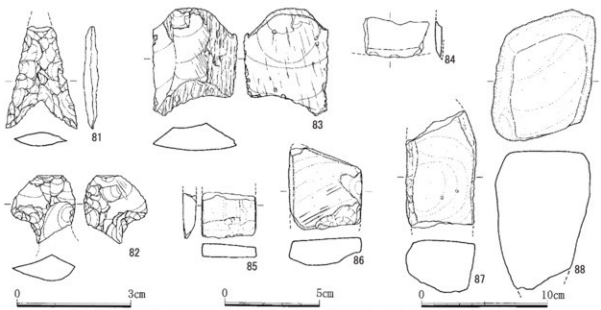


Fig. 13　溝 SD-01 出土遺物実測図7（81・82は1/1、83～86は1/2、他は1/3）

み、焼成良好。91～93は高坏で、91・92は同一個体。91は坏で外面に段が付く。内外面とも刷毛目のちナデだが磨滅著。92は脚で外面雑なヘラミガキ、内面ヘラ削り。橙褐色、胎土精良で雲母粒を含み、焼成不良。93は坏部が深く外面に段がある。磨滅し外面に刷毛目が僅かに残る。脚は外面磨滅、内面はシボリ後ヘラ削り。暗黄褐色、胎土精良で径3㎜前後の粗砂粒と暗赤色粒を含み、焼成良好。

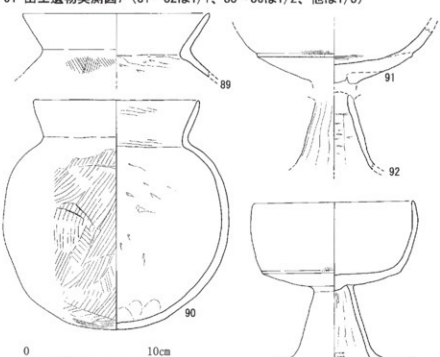


Fig. 14　包含層出土遺物実測図（1/3）

第四章　おわりに

今回の調査では、丘陵西斜面において、東西方向に直線的に伸びる弥生時代後期末頃の溝を確認した。出土遺物には弥生時代中期後半～古墳時代前期までを含むことから、近隣に当該期の遺構の存在が指摘される。この溝を東に延伸すると第3次調査B地区の環濠に交差するが、ここでは東西溝は確認されていない。削平消失している可能性もあるが、丘陵上まで伸びない可能性もあろう。

弥永原遺跡の既往の調査では、弥生時代中期後半から後期末、古墳時代前期にかけての遺構の検出例が多く、特に弥生時代後期に集中している。集落としての主たる活動時期はこのあたりにあり、丘陵全域に拡大していたものと推定されるが、その展開と内容の解明はなお今後の課題である。

PLATES
（図　版）

1. 調査区東半(西から)

2. 調査区全景
(西から)

1.溝SD-01遺物出土状況(北東から)

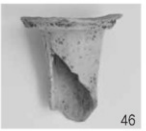
2.溝SD-01完掘後(北東から)

1.溝SD-01遺物出土状況(東から)

2.溝SD-01土層断面(東から)

3.調査終了後(西から)

13


46

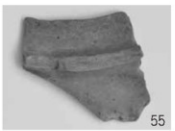
50

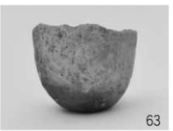
48

51

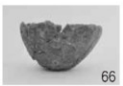
56

57


55

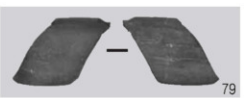

63

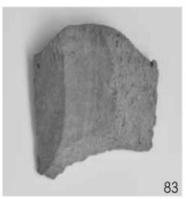
61


66

70

71


79


83

93

90

出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	やながばる　7　―やながばるいせきだい７じちょうさのほうこく―
書名	弥永原 7　－弥永原遺跡第７次調査の報告－
副書名	
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1133
編著者名	吉武　学
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667
発行年月日	西暦2011年3月18日

遺跡名ふりがな	やながばるいせきだいななじ
遺跡名	弥永原遺跡第７次
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくやなせ１ちょうめ121-3
遺跡所在地	福岡市南区柳瀬１丁目121-3
市町村コード	40130
遺跡番号	0105
北緯	33° 32′ 01″
東経	130° 26′ 17″
調査期間	2002.06.25～07.02
調査面積（㎡）	56㎡
調査原因	個人専用住宅建設

遺跡概要

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥永原遺跡第７次	集落	弥生時代後期	溝	弥生土器＋石器	環濠の一部
		古墳時代	遺物包含層	古式土師器+須恵器	

弥永原 7

－弥永原遺跡第７次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1133集

2011年（平成23年）3月18日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　高良印刷
　　福岡市中央区港２丁目４番１号